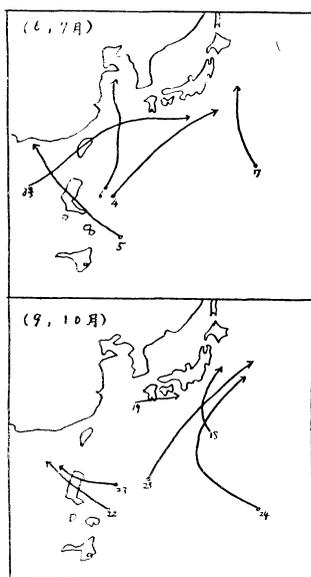


以上各型について、北半球の平均場の解析をおこなったが、このような大規模の場には、春秋にはほとんど変わらない年のあることがわかり、このような特徴的な場は、春に見付けておけば、秋にふたたび現われることを予想し、台風のみならず他の長期予報にも有効となろう。

また春秋にわたる検討した台風経路に対応したこのような北半球500mb 2カ月平均高度偏差図は実によく状況を説明しており、またこのような天気図上で眺めると、東西方向に変動していく大循環の帯状流成分のみならず、極から南下する変動すなわち南北循環も季節的推移の過程に大きく寄与していることがわかる。

4. 台風経路の季節予報的考察

春の台風経路から、秋の台風経路の予想をする方法にI型、II型、IV型のように、春に現われた経路がそのまま秋にも現われた場合には特に有効に使える。



第3図 台風経路の合成図1960年

6, 7月の台風経路の合成図と、2カ月平均500mb高度偏差図を作成して、上記の分類にあてはめることによって行なえるこの方法は、その年に実際に前駆して現われた実況を基にして行なうのであるから、この点単なる類似法よりも意義があるだろう。

追試として1960年の予想例をあげておこう。第3図のように春の台風経路図から、I型に非常によく似た状況を示していることがわかる。しかも1960年の台風は、その転向点が 120°E 以西であったので、I'型として秋には現われると予想された。すなわち1960年の台風は、秋には本邦に上陸するものはないとの予想である。結果は第3図のように本州の南海上に北東に抜けた台風ばかりであった。

5. 結 語

春と秋との台風経路には、毎年例外なく類似性があるというものではなく、年のくせによって非常によく似た傾向をもつ場合のあることを指摘した。もちろんこれは極方面から流れ出す寒気の周期性と地域性とが旨く一致し、大循環の場が春と秋とにしかも極東方面で、夏を対称点として対応した場が現われたことによるものと思われる。このような現象の目安として春秋の平均台風経路をとることは十分効果があろう。

以上季節予報の一つの新しい試みとして、台風経路の予想法を述べた。

参 考 文 献

- 1) 根山芳晴, 1959: マーカスの高層資料による台風の長期予報, 研究時報, 11巻4号.
- 2) 田辺三郎, 1959: 台風とハリケーンの発生および経路等の類似性, 研究時報, 11巻1号.
- 3) 根本順吉, 1959: 台風とハリケーンの類似性についての一つの解釈, 研究時報, 11巻6号.
- 4) 田辺三郎, 1959: 台風の発生数と北半球循環との関係, 研究時報, 11巻7号.
- 5) 笠原 彰・増田善信, 1956: 台風論, 気象講座, 第11巻, 地人書館.

【大 気 圏 研 究 所 の 設 立】

アメリカでは大気の研究を行なうため、National Center for Atmospheric Research (全国大気圏研究所) がアメリカ国立科学財団の援助により14カ所の大学の運営で、コロラド州ホルダーに設立された。

ここでは長期および短期の天気予報、局地、地区、大陸での天気制御などの研究を行なう予定である。また地球の大気圏におよぼす影響、太陽および宇宙線による影響などの研究も行なう。(1962年3月9日の科学新聞より)